お子様はあなたの声を聞いていますか

博士補聴器

人間が言語を発達させていく過程では聴覚が必須でした。子供の成長過程における言語習得と学習、社会適応能力の良好な発達は必ず良好な聴覚の上に見る事が出来ます。

先天性や疾病、外傷、薬の影響などから、聴覚系が物理的または機能的に正常ではない場合、ある程度の聴力損失を招く可能性があります。比較的軽度の聴力損失は気付きにくい反面、子供の成長への影響はとても大きいと考えられます。

さらに聴力損失は外見から簡単に気付くことができません。遺伝的に聴覚損失を持ちやすい家系や、妊娠中での疾病等以外では、聴力損失に最初から気付く事は無いかも知れません。両親は赤ちゃんの言語発達と日常生活の行為をよく観察して、必要があれば病院や診療所に行き、聴覚に問題があるかどうかを確認する事が大切です。早期発見と早期の治療、或いは早期の補聴器装用が重要です。

家系と妊娠時

- お子様の父親、母親の家系中に聴力損失がある人は居ますか？
- 妊娠期間とその妊娠前の3ヶ月以内に風疹やその他の感染症にかかりましたか？
- 1ヶ月以上の早産ですか？
- 誕生時の体重が1500グラム以下でしたか？
- 誕生後に黄疸の病気になったことがありますか？
- 誕生時に酸欠の現象がありましたか？
- 頭部と頸部に先天的に異常がありますか？（例えば、小耳症、外耳狭窄、顔面骨狭小等）

子供の言語発達

子供の難聴の早期診断は非常に重要です。健康な子供の外耳、中耳、内耳の蝸牛は生まれる時既に、すでに一定の形を備えています。つまり誕生時には赤ちゃんは既に音を聞くという物理的な構造を持っています。その他に大脳の第一次聴覚野と第二次聴覚野は誕生の時点で完成していますが、第三次聴覚野は聴覚の絶え間ない刺激を受けて3歳ぐらいまでに完全に発達します。逆に言うと3歳をすぎた後には脳の可塑性は次第に悪くなります。その為に先天性の聴力損失があったとしても早めに診断を受け、補聴器の使用を開始すれば、小児の第三次聴覚野中枢の発育が期待できます。これに反して治療があまりに遅い場合には、理想的な言葉の発達は難しいでしょう。

以下は、子供の言語発達の要約表です。

生後３ヶ月：

- 突然の大きな音で驚きます
- 大きな音で眠れなくなります
- 母親に向かって微笑みます
- 話者を凝視します
- 話者の話す一音を繰り返します

３ヶ月～６ヶ月：

- 音がある方向を向こうとします
- 母親が子供に向かって話していると、泣き止むことがあります
- 『だめ！』に対して反応があります
- 音の出る玩具に興味を示します
- ゲームをやると声を出し、軽く低い音で笑ったり、大笑いします

７ヶ月～１歳：

- 他人の注目を引きつける為に声を出します
- 発声することを楽しみます
- 自分の名前を理解する事ができます
- 怒ったり、褒めたりする音に対して異なる反応があります
- 大人の言葉をまねし始めます

１歳前後：

- 音のある方向に直接向くようになります
- より高度なゲームで遊ぶようになります
- 簡単な物の名前を理解できます（例：『ワンちゃん』）
- 簡単な指示を理解できます（例：『だっこ』）
- より高度な言葉をまねするようになります

２歳前後：

- 体の部分を指し示すと理解します
- 単語を組み合わせることができます
- 簡単な読み聞かせのお話を理解します

３歳前後：

- 大きい／小さい、上／下を理解できます
- 複雑な指示を理解できます（例：『コップを机の上に置く』）
- 500から1000の語句を理解します
- 簡単な会話ができます

４歳前後：

- 家の中と幼稚園或いは保育園での一般的な会話を理解する事ができます。
- 物語を聞き、その簡単な質問に答えることができます。
- 「だれですか？」「どこですか？」等の質問に答えることができます
- 長い間、会話ができます

子供が上記の行動をできなかったとしても、必ずしも聴力に問題があるわけではありません。これはあくまでも目安であり、子供の発達に注意を向けるためのものです。子供に問題が考えられる場合はできるだけ早く病院で検査やカウンセリングを受ける事をおすすめします。

聴力検査

聴力に異常があるかどうかは聴力検査で診断できます。子供に難聴があると疑われる場合は医師の診断を受ける必要があります。そこで詳細な聴力検査を受けた後、適切な治療や対策を受ける事ができます。